



メイドなお姉さんは
いかがですか？

Would you like maid sisters?

小説 089 タロー

挿絵 長谷川ユキノ

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版



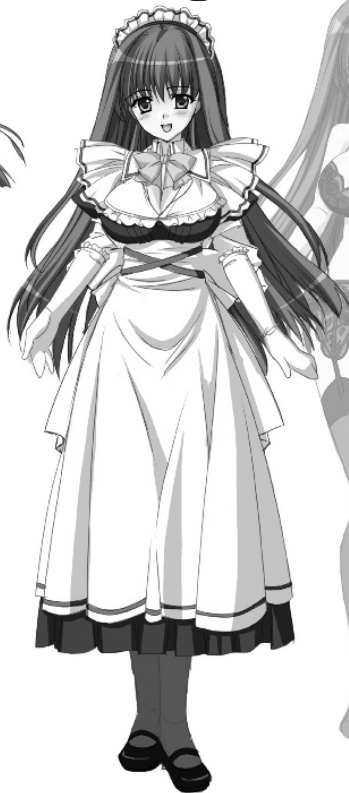
登場人物紹介

Characters



きさらぎ なるみ
如月 成海

三姉妹の次女で学園では優一の先輩にあたる。やはり弟を愛しているが素直ではないので、好きなぶんだけきつく当たってしまう。



きさらぎ あまね
如月 天音

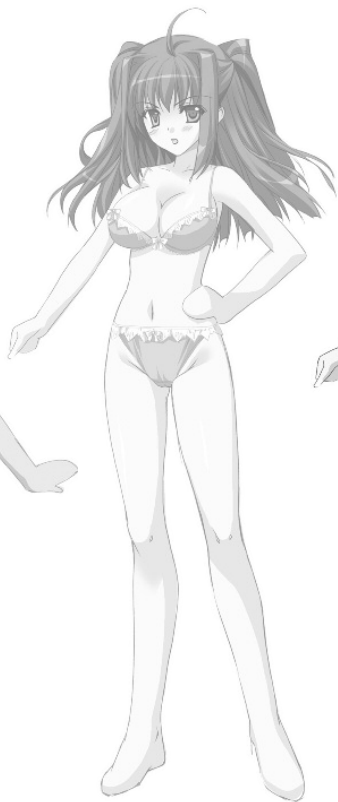
四人姉弟の長女。優一とは異母姉弟。妹たちとは両親ともに同じ。多少いたづらっぽい面もあるが、基本的には優一を溺愛している。



きさらぎ ゆういち

如月 優一

明るく真面目な印象の少年。
家族のことをかけがえない
存在だと思っている。



きさらぎ はるな

如月 晴菜

三姉妹の三女で優一と同じクラス。
明るい性格で可愛い系の容姿。は
っきり言って妹という印象だが姉
だと言い張る。

序章

いきなりメイドはいかがですか？

第一章

あま〜いメイドはいかがですか？

第二章

小悪魔メイドはいかがですか？

第三章

妬いちやうメイドはいかがですか？

第四章

混浴メイドはいかがですか？

終章

メイドな恋人はいかがですか？

きつちりとメイド服に着替えた姉が、深々と頭を下げる。艶やかな長い髪がサラリと流れ、清楚なメイドカチューシャがフワリと揺れる。

「あ……天音姉ちゃん、ただいま。今日は早かったんだね？」

ちよつとだけドギマギしながら優一。教師である彼女が自分より先に帰宅していたことに、多少の驚きを隠せない。

背を戻したメイド姉が、両手を腰前で合わせながら髪を傾ける。長い睫毛が輝く瞳を包み隠し、白い頬を美しく飾った。そして締められる脇に寄せられて、胸元の豊満な膨らみがユサツ……と存在を誇張する。

「はい。本日は成海も晴菜も遅くなりますので、早めに帰宅させていただきました。おかげで優一様をお迎えする準備も整っております」

「そ、そうなんだ？ わざわざ、ありがと」

どうやら他の姉メイド二人は、まだ帰宅しないらしい。珍しく静かなわけだ。

「それに優一様も、ご学友とのお付き合いに、随分とお時間を持たれたようですし。クスッ」

緩やかに指摘されて、ついつい頭を掻く。生真面目な次女姉相手なら罵倒されるとは思っていたが、長女姉にも言われるとは思わなかった。

(でも……天音姉ちゃんの言い方、ちよつとからかっているみたいで……いい、色っぽいんだ

よな……)

以前とは打って変わったのが天音である。ときに破廉恥とも映る態度すらあつた彼女は、メイドとなつてからは見る影もないほど規律正しい使用人という働き振りだった。

炊事、洗濯、掃除……家事のすべてを、完璧なまでに難なくこなしていく。普段は成海が担当していた家事。そこに天音が加わつたことによつて、家内は驚くほど清潔に整えられていた。

靴を脱ぎ玄関を上がれば、すぐにピカピカに磨き上げられたフローリングに足が下りる。丁寧にカバンを受け取る姉を伴えば、埃一つない階段に差しかかった。そのまま上がつて自室へと向かえば、掃除の後だというのに空気すらもが清潔にされているようだった。

(凄いな。天音姉ちゃんって、こんなにも家事、得意だったのか。昔つからそうだけど、その気になれば何でもできるんだ……)

ズボラで怠け者で、家では家事らしいことなどまったくしなかつた姉。しかしやらせてみれば、そつなく何でもこなしてしまつている。その他のことでも、いざやらせてみれば難なくこなしていく優秀な姉。

ふと、後ろを覗き見る。そこにはもちろん、カバンを持って同行する姉メイドが。

彼女のメイド服は、割とオーソドックスなタイプに見える。肩口には白いフリルがあり、その下はドレスのように膨らんでいる。腰から下はエプロンタイプで、スカートも楚々と

した長さだ。

首元には襟のようなチョーカーと、全体的には、まさに絵に描いたようなメイド姿である。が――、

（む、胸んとこ、凄いことになってるなあ……お、おつきなおっぱいが見えそうだよ……）
そう。胸の部分は強烈なフェロモンで溢れていた。乳房の七割ほど隠してはいるが、上の三割ほどは生の乳肌が見えてしまっている。チョーカーまでが包まれておらず、まるでコルセットのようだった。

おかげではち切れそうな胸元からは、深い谷間がわずかに見える。さらにキュツと押し上げられた丸い二つのナチュラルバストが、時折プルン、と跳ねるのだ。これには年頃の男の子など堪らない。

「クス……どうされました？ わたくしの胸に何か？」

「ああっ、いや！ な、何でもないよ！」

ジロジロ見ていたのがバレたらしく、小首を傾げる天音。もつとも当人は、弟主人の心理などお見通しな気配があつたが。

股間に熱を感じてしまい、ドキドキしながら優一は自室の戸に手をかける。姉に対して邪な感情を抱いてしまっていることを……隠したかつた。

が――戸を開けた途端、彼の頬は引きつった。

「あ!? こ、これって……!!」

見慣れたはずの自分の部屋。しかしそこは、一目で分かるほど綺麗に片付いていた。ゴミを捨てられ埃を払われ、床も綺麗に拭き掃除されている。シーツも真っ白で皺もなく、どこかのホテルにでも泊まりに来たかのようだった。

そのことには——不満はない。それでも少年の目は慌てて宙を泳いだ。

思春期の男子が自室を暴かれて焦る理由。そんなことなど一つしかない。本当はベッドの下を探りたかったが、姉の前ではそうもいかず、見える範囲で変化を探し、そして——、
(あ!? あんなどころに!)

ある意味、見つけたくなかった代物しろもの。それを机の棚に見つけてしまった。いくつもの本と別個になるように収納された、何度か『お世話』になった雑誌。本来、そんな場所になど置いておきたくないもの。

「あつ……天音姉ちゃん!! かつ、勝手に入らないでって言ってたでしょっつ!!」
振り返った優一は思わず怒鳴ってしまった。情けないような羞恥心に、カツと頬が灼熱する。

人には——特に姉には見られたくなかったもの。それはもちろん——エッチな本である。性に目覚め始めた男子ならば、まず誰でもお目にかかる本だ。

当然、それを家族に見せるなど恥ずかしくてできるはずもない。だから隠してあったし、

部屋に入るのも禁じていたのだが、こうして表に並べられているということは、見られなかったはずもない。

「申し訳ございません。ですが、ご主人様のお部屋を汚したままというのは、メイドとしては失格ですから」

スツと長女姉の腰が折れる。しかし顔には、少しも悪びれた素振りが無い。むしろ口の端をヒクつかせて笑いを堪えているようですらあった。

（ううっ、最悪だよ……：……：……：……：……：……：……：……：……：……）

肩を震わせ少年は俯く。それもそのはず。彼が愛用していたエッチな本は、ずばり『姉モノ』の内容だった。家族である姉に性的に迫り、関係を結んでしまうというシチュエーションを特集した代物である。

こんなものを発見すれば、『弟が自分を、そういう目で見ていたのか』と思われる方も無い。

場合によっては、家族の関係を壊しかねない秘密。姉を溺愛している優一にとって、それは耐え難いことだった。

（どうしよう……：……：……：……：……：……：……：……：……：……）
（……）

主人という立場を笠に、使用人に性的奉仕を迫る。そんなシチュエーションもよく耳に

する。たとえ現実とは異なっていて、明らかに性の対象と見られていると知れば、やはり懸念しないではいけないだろう。

「……ご……ごめんさい。変なの、見ちゃって……」

とにかく、謝る。誤解されて嫌われるなど我慢できない。いや——実のところ誤解ではないけれど——。

「まあ！ 頭をお上げになってください。何を謝罪される必要があるのです？ わたくしは何もサレてませんわ」

共に腰を折り美人姉の顔が覗きこんでくる。もつともその口元には、まだ笑いを堪えているような気配があるが。

「……でも。僕、姉ちゃんたちを、その……」

エッチな目で見ちゃって。と頭に浮かぶが、そこまで認めてしまうのもまずい気がする。「気になさることなどありませんわ。ご主人様のお年頃なら、女性に興味を持たれるのは当然ですから」

そう言つて頭を上げさせてくる天音。目と目がピッタリと合うと、濡れるような瞳に間近で搦め捕られる。

（あ、天音姉ちゃん……やっぱり、綺麗だ。肌も白いし、目の形もいいし。それに……いい匂いがする）

頬を包みこまれていると、温かい掌熱にほわあ……つと溶かされていくようだった。それに鼻が触れるほどの距離なため、姉の吐息が鼻腔をくすぐり、何とも言えない甘い香りが脳髓を痺れさせるかのよう。

「ですが、ご主人様がわたくしたちを、そのような目で見ておられるのでしたら、わたくしにもお手伝いできるかもしれません」

え？ と呆けた返事が滑り出る。すでに桃色に滲んだ頭では、上手く理解ができなくなりつつある。

「もし、よろしければ。わたくしが、お慰めしましょうか？」

覗きこむ瞳は優しく、同時に悪戯っぽく輝いていた。それでいてなお、抗い難い女の魅力に溢れている。

「慰める、つて……どうということ？」

気の抜けたように自然と口をついて出た。どこかで理解しているのに、感情がなかなか追いつかない。

目の前にいるのは、何よりも愛してやまない家族。他の誰よりも魅力的な姉の一人。憧れであると同時に、密かに——その肢体を思い描いては、股間を熱くしていた魅惑の女性。

「……お分かりでしょう？ わたくしが……本当に、お相手させていたかどうかです。クスツ」

正直、わけが分からない。本来、ありえるはずのない女性からお誘いを受けている。しかもその実、もつとも異性として意識していた相手から。

「いつ………いい、の？」

恐る恐る訊ねてみる。拒絶されれば間違いない壊れる関係に、躊躇いを覚えないはずがない。

すると美女は、艶めく唇に笑みを零して、スツと顎を引いてみせた。

「もちろんです。ご主人様のお相手、喜んでお勤めさせていただきますわ」

吐息が驚くほど近くなる。鼻が掠め、瞳が触れ合うほど近づき、そして――。

チュツ、と唇に柔らかな感触。微かな湿り気とプリツとした肉感に、身体の全神経が集
中してしまう。

ゼリーのような優しい弾力と、ツルリとした滑らかさ。それでいて吸いつくような吸着感が、堪らなく心地いい。かかる鼻息すら背筋をゾクゾクさせる。

(ぼ、僕、姉ちゃんと……キス、してるんだ！)

閉じられた脛に釣られるように、優一もまた、うつとりと脛を下ろした。そして、温かい美女姉の身体をギュツと抱きしめる。なけなしの知識、くすぶる本能を目覚めさせるように。

そして甘い色香に惑わされるまま女体を味わうべく、皺一つない純白のベッドに美姉を

抱きしめて倒れこんでいった。

「つつぷはっ。はあ、はあ、姉ちゃん、天音姉ちゃあん……！」

「あんっ、そんなにがつつかなくても、わたくしは逃げませんわ」

甘いファーストキスを終えるやいなや、優一は制服の上着を脱ぎ捨てて、ベッドに横たわる天音に貪りついた。決して乱暴ではないのだが、初めて味わうであろう女肉を前に、ついつい手足が先走ってしまふ。

矢も盾も堪らない。やはりまず、姉の豊満な胸だった。もつとも目につく乙女肉を、確かめるように揉みこんでいく。

「あああ、や、柔らかい。す、凄く大きいのに、何て柔らかいんだ……！」

仰向けの姉に覆い被さり、乳房を両手でもつちりとこねる。グラビアアイドル顔負けの膨らみは、メイド服越しにもはつきり分かるほどの柔軟さがあつた。

指を、掌を押しこむたびに、ムニユツ、ムニユツ、と形を変える二つの豊乳。それでいて、押ししても押ししても優しく跳ね返し、フニツと包みこんでくれる甘い丸み。

（凄い……触ってるだけなのに、何て気持ちいいんだ！）

緊張が興奮に変わり始め、弟少年の手は乳揉みに没頭していつてしまふ。指に絡む肌の感触が、優しく押し返す柔らかさが、堪らなく脳髄を沸騰させていく。

「ああ、はああ、ご、ご主人様だったら……そんな、服の上から……んっ」

弟に覆い被さられる姉メイドは、うつすらと頬を染めてたしなめてくる。その美顔は、嬉しそうで、それでいて微かな恥じらいが見て取れる。

もじつ、と身を振る美しい使用人姿。言われて気づけば、それはまだメイド服に包まれたままだった。

「はあ、はあ、ぼ、僕っ、姉ちゃんのおっぱい……見たい……」

喉を鳴らして姉の顔を見上げる。触らせてもらえるのだから、見ることも許してくれるだろう——実際はそこまで考えたわけではないが、とにかく欲求はさらに先を求めている。

「はああ……クスッ。も、もちろんですわ、ご主人様」

優しい姉は、あくまで弟主人を受け入れる気のようにだった。フリル状の肩部に両手をかけると、左右に開いてゆつくりと下ろしていく。

スルスルと、白と紺のツートン生地が脱がされていき——肩が見え、胸部が下がり、いよいよ生の上半身が拝めるところで。

（あああ、そうか。ぶ、ブラジャーもあつたんだな……）

上半身のメイド服が腰まで下ろされても、姉乳房には下着が身に着けられていた。まあ、成長した女性ならば当然なのだが。

黒色の、花柄をあしらった大人のブラ。肩紐はなく、真横に伸びた布が、たわわに実った乳肉二つを支えている。どこかエロティックなそのデザインは、まるで優美なコルセツ

トを思わせた。

クスツ……と美人メイドが苦笑する。ブラに釘付けの彼の心理などお見通しだと言いたげだ。アダルトなブラにドキドキしつつも、生の乳房をおあずけにされた多少の落胆を。

「そんなに……見つめないでください。わたくしはどこにも逃げませんから」

朱色の頬を緩ませると、天音は両手を背中に回し、プチン、と何かを外してみせた。するとストラッププレスのブラが、フワツと微かに持ち上がった。

「つつ……さあ、外してください。優一様の望むように……」

優しく、甘く。誘うような促しに従い、少年は指先を伸ばして浮かんだブラを引き抜いていく。両サイドから、拘束を取るように。

ススウウウ……ツ。ぷるんっ、タプタプぷるりんっ！

「ゴクっ！ お、おおお……ねっ、姉ちゃんの、お、おっばい……!!」

(す、凄いつ！ 生で見ると、本当に大きいっつ!!)

ベッドに沈み揺れる、生まれたままの生姉乳房。それはまさにメロンを思わせる特大サイズで、とても綺麗な球形をしていた。

プルプルと揺れる乳房は、まるで極上のプリン。瑞々みずみずしい肌はやはり白く、ミルクを溶かしこんだような柔らかな色合い。さらに、先端に備わった小粒は薄い薄いピンク色で、淫靡さと母性という、男の欲求を兼ね備えた見事な乳球だった。

「っはああ……み、見られて、しまいましたわね。さあ、ご賞味くださいませ……」

霞のような熱いため息。またも密やかに振れる腰。揺れる甘肌で確実に誘っているのに、しばしば視線を逸らす様子は、淫靡なのにどこか初々しく雄の情熱を昂ぶらせてやまない。

「つつつ、姉ちゃんつつ！」

まさに純心聖母のような誘いに、堪らず乳房にむしゃぶりつく優一。両掌で左右から掴むと、谷間に鼻先を突っこんでしまう。

「ああんっ！ そんなっ、ご主人様あっ、お舐めにい……っ！」

主人少年の唇が、舌が、きめ細かい乳肌をネチヨネチヨと滑っていく。それは本能的な愛撫であり、また母性への渴望でもあった。

「んっ、じゅじゅっ、あああ、姉ちゃん、天音姉ちゃああんっ……！」

「ああ、はああっ、ゆっ、優様のお口っ……き、気持ちいいです……っつっ！」

貪るような唇愛撫に、裸の上半身がピクピクン！と悶える。少年には理解できない心地よさが、成熟した肢体を昂ぶらせているようだった。

もちろん優一も昂ぶっていく。柔らかい肌はスベスベで、頬を包む感触が堪らなく気持ちいい。相手の淫熱が伝わってくるように、意識をぼわぼわと夢心地にさせていくのだ。

「んむっ、あふっ、あああ、姉ちゃんのおっぱい、気持ちいい……美味しいよおっつ……！」



見られたのだろうか!? と、入り口に目を向ければ、そこに入ってきていたのは――

「ゆつつユウ!? あ、あ、あ……アンタ……!!」

(そつ、そんな!? よりにもよつて、ユウに!!!)

最悪だった。ある意味、一番見られたくない相手に、一番見せたくない場面を見せてしまったらしい。見ていないなら、きつとノックするはずだ。

実際、弟の目は血走っている。息も荒く、どこか――夢の中に紛れこんでしまったように気色けしきばんでいる。どう見ても、穏やかで優しく、しかも愛らしい普段の弟の様子とは思えない。

そして彼は熱に浮かされたような表情で、ガバツ! と成海の身体に覆い被さってきた。
「キヤアアツ!! ユ……ご主人様、何をつつ!!」

「姉ちゃん、成海姉ちゃん!! 僕つ、もう我慢できないっつ!!」

胸の谷間に顔をうずめてくる弟はとても愛らしく、抱きしめられるとドキドキしてしまう。しかし事態についていけないメイド少女は、咄嗟に主人を押し剥がそうともがき出す。

「だ、ダメっ! あつ……イヤ、胸つ、触つちゃ……んんっ!」

「でも、姉ちゃん! 姉ちゃんさつき、僕にいつぱいエッチして欲しいって言ってたじゃない!」

「あんっ! あふつ、そ、それは……ひゃあつっ!」

優一に乳房を撫で回され嬌声をあげつつも、成海は必死に言い訳を考えた。やはり弟は自分のオナニーをばっちり目撃したらしく、誰を想っていたのかもバレているようだった。（ああっダメ……ユウにこんなコト知られちゃうなんて……恥ずかしくって何も考えられないっつ！）

頭に考えをめぐらせるも、名案など何一つとして思い浮かばない。それどころか——身体が、心が、何かが壊れたようにグラグラと熱くなってきた。

「キヤ、ダメ！ ムネ、見ちゃったら……ひああああんつつつ!!」

（ダメっ！ か……感じちゃうっ！ ユウにムネ見られて、先っぽ、ペロペロされてえつつ!!）

興奮した弟は、すでに脱ぎかけだった胸元とブラをずらしていつて、少し覗いた桃色乳粒を口に含んでしまう。それだけで、胸と脳天を突き抜けるような愉悅が理性を狂わせていくのが分かった。

「んじゅっ、ちゅむちゅむっつ。ああ、成海姉ちゃん、可愛いブラしてるのに、おっぱいの先っぽ、ピンピン……ちゅぷっ」

「ああああああんつつ!! いっついヤっ！ 言わな……はああああんつつ!!」
うつ伏せに抱きつかれ、たわわに実った乳果実を味わわれていく美少女メイド。拒絶を唱えるも、それはすぐに快樂嬌声に打ち消されていく。

成海のメイド服は、他の姉妹よりもきつちりしており、胸元も首まで隠れているタイプで、スカートもごく一般的な女子学生程度の丈だった。フリルなどは愛らしさもあるが、総じて色気全開のデザインとは言い切れない。

だが、そんな胸元を押し上げる膨らみは、成人女性から見ても十二分な豊かさがあり、男なら誰でも吸いつきたくなる魅惑の乳房だった。

そして、そんな丸みを最後に隠していた下着は、これまた初々しさと背伸び感を漂わせた、ピンク色のレースブラである。ストラップなどにフリルがあしらわれ、愛らしさの中にもさりげない色気を主張する、確かに成海に相応しい代物だった。

だが今は、そんなささやかな着飾りなど大して役に立たないでいた。すでに胸元もブラも、当の本人によつてはだけられている。八割ほど見えてしまった生乳房は、昂ぶった弟の舌と唇によつて甘く舐め回され、硬くしこつた桃色も、授乳のように悦楽吸引されているのだ。

「はあっ、はあんっ、ご、ご主人様つつは、激し……ひあああああんっ!!」

「んじゅっ、はあ、はあ、でも姉ちゃん、激しくシテ欲しいって」

「そっそれは、だつて、ご主人様がみんなとばっかり……つつ!! んああああああああつつ!!」

切ない本心の吐露は、感電するような強刺激によつて遮られてしまった。優一の唇が、

キユツと乳首を甘噛みしたのだ。これは物凄い乳悦快感で、乳腺と子宮がジュワアアツと沸騰して背筋がエビのように跳ねてしまうほど。

「やああ！ ふああっ！ らめ、らめらめええ！ 乳首噛んじゃ、噛んじゃ……にやああああああっっっ!!!」

クチュクチュ、コリコリつ、と、いやらしくも愛くるしい乳先愛撫に、ビクビクとのたうつように感じていく成海。長い髪を波打たせて背中を反らし、舌を伸ばして唾液を零しながら、情けないくらいに悶えよがっている。

「んじゅっ、はああ。でも、成海姉ちゃん、乳首ピンピンだよ？ 僕、堪んないっ。はむっ、コリコリっっ!!」

「んにやつ!! んなあああああああああああっっっ!!」

（何て……何て恥ずかしい声っっ!! わたし、ユウにムネ弄られて……噛まれて、凄く感じちゃうっつっっ!!!）

胸の熱は異常なほどで、紅潮した頬は火傷しそう。下半身にまで伝播した性悦は、グツグツと胎内を沸き立たせて熱い欲蜜を下ポドポと垂れ流していく。ずれたショーツは元に戻っていたが、すでに無意味なくらいに愛液でグショグショになっているのが分かった。

それほどに——弟に、愛弟に求められる感触は甘美なものだった。ビリビリと痺れて全身が性感帯になり始め、噛まれた際の微かな痛みすら気持ちよく、脛唇がヒイヒイと喘ぐ

のを抑えられない。

「いっ……痛、い……つつけど、けどおつつつ!!」

「クチユクチュツ、ぷはああ、け、けど……?」

「けっ、けど……き、気持ち……い、いいつつ。凄く、気持ちいいすうつつ!」

（ああっ、言っちゃった! 乳首嘯まれて痛いのに気持ちいいだなんて! 何てはしたなの、わたしつつつ!!）

白状してしまつてから、途方もない羞恥に身を焦がされる成海。まるで痴女みたいだと赤面しつつも、痺れるような性感が——何より、優一に愛撫されていることが、どうしようもなく気持ちよくて喜ばしい。

もう、うそなどつけなかった。本心では身も心も、弟主人に激しく抱いて欲しかった。だからこそ、不意に訪れた機会に愛欲が沸き立ち、膣も子宮も今か今かと弟勃起を待ち望んで涙しているのだ。

そして——燃えるような渴望に濡れ悶える淫靡膣に、ついに優一の指が押し入ると——
ビクウウツ!! ビクビクビクウウツ!!

「んにやううああああああんつつつ!!! らめえ! らめらめソコらめなのおおつつつ!!!」

ただでさえ目覚めきっていた乙女の媚膣が、さらに焦がれた男の一部を迎え入れたのだ。

理性を置き去りにすつかりその気になっていた女体は、これまでの鬱憤を吐き出すように、腰をガクガク跳ねさせて悶え狂った。

ぐちゅっ！ グチュグチュニチュニチュッ！ズボッ、ズボッ！

「はヒイイイっつ！！ らめっつイっちやいますうう……！！ 成海、イっっちゃうんれす、ご主人サマアアア……！！」

「はあ、はあ、す、凄いよ姉ちゃん……こんな、こんなに気持ちよくなれるなんて……！」
激しく姉を責めていた弟主人も、目を見開いて感嘆の色を浮かべていた。とても処女とは思えないよがりっぷりに、どこか気圧されながらも、愛撫に没頭していく様子である。

無理もない。普段真面目で気が強くて、歯に衣着せぬ物言いをしてくる姉が、初めての愛撫でこうまで喜びを顕にする女体だなどは、一体誰が想像できるだろうか。

いたわるよりも狂わせることを目的としたような弟指挿入に、確実に女として開発されていく次女メイド、成海。中指と薬指を同時に差しこまれて、蜜を吸う蜂のように熱く喜び喘いでいく。涙に濡れた頬は真っ赤で、だらしなく開いた口元からは幾筋もの唾液が伝い漏れている。

そして何よりいやらしいのは、やはり指を受け入れた乙女腔。すでにトロトロの花弁は大した抵抗もなく指を受け入れ、ヒクヒクと収縮しては美味しそうにしゃぶってしまっている。はみ出た襷を淫らに絡みつかせ、赤く、柔らかく、しかし貪欲そうにくばあ……っ

と奥を覗かせながら。

意識しての動きではない。だが身体はあくまで正直で、愛しい主人の指と知るや否や、浅ましくも肉粒までが顔を出し、ヒクン、ヒクン、と嬉し泣きしてしまうのだ。

「はあ、はあ、す、凄いつ。成海姉ちゃん、こんな風にされたかつたんだ？ メチャクチャにされたかつたんだね？」

と優一に囁かれ——もう、理性が霞んできた美少女メイドは、とうとう、自分でも無意識に近かった本性を吐露してしまった。

「ひい、ひああ、んあつ、言わないでええ……わ、わたし、ほんとはユウの……ご主人サマのこと考えるだけで……マ○コグチヨグチヨになっちゃうエツチな女の子なんですうう……つつつ！」

（そ、そうつつ。わたし、本当はずつと前からユウに……ガンガンにエツチして欲しかったんだ。毎日毎日朝昼晩、ユウのメイドとして、マ○コ、ユウの形になっちゃうくらいに……つつつ!!）

口にして初めて、自分の内心に気づかされた成海は、積年の想いに堪らなくなつて弟主人に弱々しくおねだりを始めた。

「おっ……お願い、ですうう……わたしにも、ご主人サマの……お、オチンポ、くださあい……つつつ!!」

そして、のっそりと起き上がると、ショーツを脱いで四つんばいになり——お尻を突き出して弟の肉棒を一心に頼みこむ。

「もう……アナタのオチンポじゃないと、我慢、できないんですうつつ。欲しくて欲しくて、切ないんですう……つつ!!」

ふつくらむつちりと肉づくヒップにツヤツヤと輝く汗。躊躇いながらも揺すられるくびれたウエスト。少年に楽しまれた豊満なバストは実に美味しそうな薄桃色で、むにゅんたプンと柔らかかく引力に引かれ踊らされている。

そして何より乙女の入り口は、すでにグシヨグシヨに濡れそぼっており、いかにも物欲しそうに柔肉ビラを呼吸させていた。

「ご……つつご主人サマの、お、お情け……成海につつ、くださぁい……お願いですウウ……つつつ!!!」

サーモンピンクの奥とヒクつく肉芽を掲げる姉。真つ赤な泣き顔を肩越しに振り返らせる美少女。それは卑猥で儂くて——しかし、同時にある種、何人もの男が夢想する『従順で淫乱なメイド』と言うべき姿だった。

ドキドキ、ドキドキ……!!

胸の鼓動が騒音のように鳴り響き、激しい血流が身体中を真つ赤に染め上げていく。

それが興奮からくるものであることは、ここ数日の経験からすでに明白だった。

それでも——今、この瞬間の高鳴りは、いつもとは違った、何か荒々しい、一種の激情に近いものがあることを、ぼんやりと優一は悟っていた。

（う……うそみたいだ。あの、気の強そうな成海姉ちゃんが、こんな……お尻突き出して、僕のオチンチンをおねだりするなんて！）

ここまで来ると、どこか夢の中の出来事のような感じだった。もちろん、この部屋に押し入った当初から、姉とセックスする気にはなっていたのだが、まさかこうまで従順に、まるで快楽に屈服するかのように結合をねだってくるとまでは、思いもしなかったのだ。

じつくりと見やる。姉のお尻はむき出しで、白い素肌が腰一面を覆っている。ストッキングは穿いているがスカートは大きくまくれあがり、フリルも相まって、まるで咲き誇る花のよう。そして中心の雌蕊めしべには——美しくも淫らな、呆れるほど濡れそぼった肉の花弁。（すっ凄い……真っ赤に充血してて、ピラピラがぱっくり開いてて、パクパク動いてて、お、オマメもピクピクしてて……お漏らしみたいにグチョグチョっつ。こんな濡れてるの、見たことないよ！）

まさに大洪水という状態だった。姉妹の誰よりも多い蜜は、強い粘性にも拘わらず、多すぎてポタポタと滴り落ちてはストッキングをベタベタに濡らしている。しかも陰毛は意外なほど濃く、絡みつくような強烈な淫臭を漂わせるほど。

匂い立つ蜜の香りに——咲き誇る濡華に、誘いこまれるようににじり寄る弟少年。ズボンを脱ぎ去って、挿入欲に硬くそそり立つ分身を姉メイドの股唇に添えると、

「あああ、熱い……ご主人さまの、オチンポ……！ ガチガチで、大きくて……」

「っうん。いくよ、姉ちゃん？」

「つつつ、ください……な、中にい……つつつ！」

「緩い弧を描く立派な巨根が、ついに最後の許しを得てぬちちりと濡れ唇を割っていき——つつつズドオオンツツ!!——つつづつつつ！」

「うああ!!! んやああああああああああんつつつつ!!!!」

「うあ……つつ!! すつ、凄い、締めつけ……つつつ!! 姉ちゃんつつつ！」

昂ぶる挿入欲に逆らわない、思い切りのいい強烈な一突き。それは入り口付近の抵抗感をも一息に貫き、グチュリ! と根元まで納まってしまふ。

途端、肉壁が肉棒全体を強烈に締めつけ、甘い痺れを少年にもたらす——のは、いつものことだったのだが。

「は、あ、ああ……!! はひっ、ひっ、はっ、はあ、ひくっ……!!!」

「ね、姉ちゃん？」

四つんばいで背後から結合された次女姉は、納めた瞬間、甲高い嬌声を張り上げて背筋を跳ね反らした後、ドサリとシーツに崩れ落ちたのだ。

強引すぎたのかと一瞬ヒヤリとする。しかしよく見れば、姉は何かを堪えると言うよりは、むしろ何かを堪えきれずにヒクヒクと痙攣しているような——どこか、達した直後の女性を彷彿とさせるような、そんな印象だった。

「ね、姉ちゃん、もしかして……い、イっちゃった？」

優一が躊躇いがちに窺うと、背筋と腰を震わす成海は、虚ろな目で舌を垂らし、呟くように声を漏らした。

「ひっ、はひいっ……!! はああああ、す、すご、いい……オ、チ、ン、ポ、気持ちいいいっつつ」

（うわああ、姉ちゃんこそ凄いよ。多分初めてなのに、入れただけでイっちゃうなんて！）以前の動揺ぶりから、彼女が処女だったのは間違いないと思えるし、それらしい手応えもあった。にも拘わらず、破瓜の一突きで絶頂できるとは、何と淫乱な美少女肢体なのか。多分、散々オナニーしていた要素もあるだろう。それでも、あつさりと感じることできる姉に猛烈に興奮してきてしまい、少年はすぐにも、しっかりと腰を振り始めた。

「つつ姉ちゃん、いくよっ！」

じゅぶううっ！　じゅぶっじゅぶっ、ぐちゅっぐちゅっ、ばちゅん！　ばちゅん！

「ひいっ!? あひいひいひい!! あっあっ！　いいっ！　すごっ、深いっ、いいいっつ!!!」



やはり本当に達していたらしく、一度引き、また処女膜辺りをこすつても、成海はすぐに嬌声をあげ始めた。

「んあつ、ひあああつっ！ いい、硬いの、深いの、いいのおおっっ!! コレいいのおおっっ!!」

あられもない乙女声を張り上げる美少女メイド。いきなりの本格的セックスだというのに、自らも腰をグラインドさせ、弟のピストンを一心に、嬉々として受け止めている。そこには破瓜の痛みなど微塵も感じさせない、本当に処女だったのかと疑えるほどの、愛と淫欲に溺れる一人の女しかいなかった。

裸の弟腰がぶつけられ、汗と蜜を散らせてよがる、剥かれたメイドの乙女尻。瑞々しさと滑らかさを合わせ持つヒップは、まさに十代後半らしい完成寸前の色香となつて、甘い肉づきと張りを描いている。しかし、その表面を放射状に広がり続ける愛液は、清純さとはかけ離れた匂い立つような淫猥さ。

そして胸元では、はだけた乳房が悩ましいダンスを踊っている。九十前後はあろうかというたつぷりとした巨乳は力強い後背位にブルブルと跳ね回り、それだけでも十分艶かしいというのに——ふと気がつくくと、姉は自らのその巨乳乳首を、指で摘んでクニクニとシゴいているではないか。

（ああっ何て！ 何ていやらしいんだ、成海姉ちゃん！ こんなにお尻突き出してギユウ

ギユウ締めつけてるのに、おっぱいまで自分で弄ってるなんて！

まさに貪るようなセックス。快感に蕩け、淫欲にただれた乙女のような、男を味わい尽くして性感を磨き上げる淫靡濡れ膣と豊満肢体。

そんな彼女の胎内は、これまた実にいやらしい動きの淫肉の坩堝るっぼだった。他の姉に比べてやや分厚い肉壁は、ねっとり絡みつくようにサオをシゴき上げ、泡立つくらいに恥蜜をぬりたくってくる。さらに処女膜辺りのくびれはキュツと根元を搾りこみ、熱勃起を離すまいと強く、切なそうに蠢いていた。

「はあっ、はあっ、い、いやらしいよ姉ちゃん。とつてもエッチで僕、どんどん入れちゃうっっっ！」

幾分慣れたはずの勃起性感が、淫らすぎる次女姉膣でジンジンと痺れさせられていく。正直、姉をリードしてあげるつもりだったが、海の底に誘いこむような柔膣の前に、誘惑に屈することを止められなくなってしまう。

しかも、驚くほど貪欲に求めてくる媚姉は、さらに激しくヒップを振り乱して弟根にむしゃぶりついてきた。

「ああっ、はあああああっっ！！ いいっ、いいのお！ ユウの……ご主人サマのオチンポ、もつとくたさああいつっ！！」

「わっ!! ね、姉ちゃん、そんな動いたら千切れちゃうよおっっ！」

一番に変化を嗅ぎ取った晴菜が、シュツと唇を窄めた。温かい口内が軽い真空状態になり、そして——くちゅくちゅつ、チュウウウ……つつつ。

「あつ? あああああ……つつ! お、お汁、吸われちゃううう……つつ!」

鈴口に滲み出た先走り汁が、姉の小口に吸引されていく。その感覚は愉悦そのもので、ちよつとした射精のような甘い開放感まであった。しかもその最中に縦筋を舌先で広げられて、管まで吸い出されるような感覚に尿道がユルユルにされるのが分かった。

「うあああつつ。き、気持ち、よすぎるよ、姉ちゃん。ほんと、出ちゃいそうだよ……」

「んはっ、気持ちいいんだ? うれしっ。もおつといっぱいチュパチュパしたげるね?」

見上げる三姉妹の明るくも艶しい誘惑顔。だが、フェラチオで優位性を見せつけた妹に、姉たちは少々ご立腹だった。

「何言ってるのよ! ちよつと、ふえ、ふえ……お口が上手いからっていい気になって!」

「まったく、いつの間にかフェラが上手になってるなんてね。油断したわ」

やはり長女と次女も、経験の差には勝てないようだ。集中的に性感を高めていける妹に主人の気が向き始めているのを、鋭敏に感じ取って唇を尖らせる。

「では……わたくしが勝っているところで、ご奉仕いたしますわ、ご主人様」

不満気味だった天音が意味深に微笑んでツイと上半身を前に出す。そして反らされた胸元がムニユリと根元に押しつけられると——ムツチュリつ、きゅつ、きゅ……つつ。

「あはっ、あああ……！　ね、姉ちゃんのおっぱいっ、や、柔らかい、よおおっつ」

とても深い谷間が開かれ、その間に包みこまれる硬ペニス。微かな陰毛ごと根元から挟まれて、優しく柔らかくふんわりとシゴかれていく。

九十五センチのGカップという、実に大きな柔爆乳に愛撫されて、少年の性感はますますヒートアップさせられる。それは襲えない膣内のような感触で、緩やかに上下されるだけで、挿入感にも似た雄快楽が待っていた。

たっぷりと張り詰めた爆乳摩擦は、やはりいつ味わつても飽きの来ないパイズリ快感。ただでさえ水気とソープで潤う美肌のぬめりは素晴らしく、熱いサオが優しく、心地よく、しかし確実に勃起神経を沸騰させられていく。しかも、今日は――、

「ねっ、姉さんっっっ！　わ、わたしだって、むむ、ムネの大きさには自信あるんだからっっ！」

と、もう一人の巨乳少女まで一緒になつて柔乳を押しつけてくるのだ。途端に根元とサオは、心地よすぎる柔肉に四方を囲まれてしまう。

「うああっつ、あ、ふあああ……っつ！　そっ、そん……な、オチンチン、おっぱいでいっっぱいにいいっつ」

ぷるっぽぷるっぽ、ぬっちょぬっちょ、ぬちゅっ、ぬちゅりっつ……。

二つの谷間に中央で挟まれ、天を突く肉柱がゆっくりと磨かれていく。そして快楽神経

は、絶え間ない乳圧とこすれあう淫刺激を主に伝達しながらヒクツ、ヒクツ、と袋ごと悶え跳ねるのだ。

「んっ、んっ、はああっつ。い、いかがですか？ ご主人様。わたくしたちの乳房は、お気に召しますか？」

「あああっ、うん……気持ちいいよ、とつてもお……っ」

「んうん、はあっ、む、ムネで、お……オチンポするなんて、ああっ、すご、い。ピンピンになっちゃってえ……っ！」

同じくパイズリしてくれる成海の乳房も、少年にとつては大変気持ちいい。センチやカップでは負けているが、柔らかみでは勝っているらしく、つきたてホカホカの餅のようにムニユムニユと絡みついて横合いからシゴき上げてくれる。

また、仲良く乳摩擦する長女と次女は、次第にリズムカルにタイミングを合わせて動き始めた。こすれる部分が徐々に泡立ち、さらにヌルヌルになりながらヌチヨヌチヨと音を立てる。

「はむっ、んむじゅっつ、んもお。お姉ちゃんたち邪魔で、おちんちんいっぱい舐めれないよお。れるっ、んじゅむっ……」

四つもの巨乳果実に邪魔されては、さすがに思うようにはフェラチオできない晴菜だったが、それでも負けじと龟头を口に含む。そして口内でグチュグチュと泡立つくらいに徹

底的に舐め回していく。

ぬちゅっ、ぬちゅっ、ぬちゅっば、クプツ、じゆるじゆるつつつ、れるれるっ。

（ああっ、凄すぎる！ 先つば舐められるのに、根元とかはおっぱい四つでシコシコされて……つつっ！）

この間ずっと、優一はだらしなくマットの上で寝そべっているだけだった。左右から天音と成海の爆乳と柔乳にパイズリされながら、下方からは青菜の小口にフェラチオされるという異様な十字構図。それはまさに、気に入った雄に群がる雌たちという印象。

どこか捕食されているような気分。まるで、まな板の鯉。姉たちに料理され、その胎に納められるのを待つ、吊り上げられた無力な魚。今もこうしてペニスをつとりと痺れさせられ、内に眠る白いクリームに念入りに味付けされているのだ。

だがしかし。

それでも構わない。大好きな美しい姉たちに喜んでもらえるなら、いくらでも子宮にご馳走してあげたい。

「姉ちゃんっ！ 気持ちよくなって、僕っっ！」

「きゃん!? あうううんつつ!!」

トリプル奉仕に堪らなくなった雄少年が、自らも動いて女肉を味わい始めたのだ。泡まみれの腰を上下に振り上げながら。

ぬちよつ、ぬちよつ、ぬぶつ、にゆぶにゆぶぶぶつ。ぶにつぶにつつ！

「あああ、はああ、ご、ご主人様のおペニスが……胸を、貫いてえ……つつ！」

「んあつ、にやあ、あつつ！ こ、こんな、硬いのが、いっぱいこすれてええつつ！」

天音と成海、四つの乳肉の間をピカピカのサオが何度も何度も穿^ほつていく。ただでさえパイズリ摩擦が起こつていたところへ男根摩擦まで加えられて、勃起神経だけでなく、女性性感もがジワジワと高められていく。

そして肉柱の先端では——ぐちゅっぐちゅっ！　じゅぼっじゅぼぼっ！

「んぐっ?!　んぐっつ!!　んああ、グプグプ……れろっ、くちゅっ、んぐちゅつつ!!」

上から龟头を飲みこんでいた晴菜が、雄々しい抽送を小口いっぱいに受け止めていた。

少年ピストンは童顔少女の唇を貫き、甘い唾液に搦め捕られつつ、奥へ奥へと頭を運ぶ。それはやがて、喉の中まで何度も何度もプッシュしては、少女の口内全体で先つぽをシゴかせていく。

「あああ、あああ、き、気持ちいい。オチンチン、オチンチン痺れてええ……!!」

（た、堪らないよ！　姉ちゃんのおっぱいも、口も、柔らかくくつてぬるぬるしてて、最高つつ!!）

見れば姉たちの眉根も緩み、恍惚とした表情となっている。乳房を愛される長女と次女は、息も荒く、時折ピクピクと肩を跳ねさせた。三女はやや息苦しそうなものの決して唇

を離すことなく、首を伸ばして舌と喉で、荒々しいくらいに亀頭全体を搾り上げていく。これはこれで、本当に堪らない快感だった。柔らかく滑らかな乳肉にサオをぬちぬちと愛撫され、尿道がうっとりとうろと蕩けさせられる。そして出口は舌先と喉にぬめぬめとシゴかれ、ぱっくりと縦筋を開かれてしまっているのだ。

これでは快楽液を、せき止める術すべなどありはしない。愛情たっぷりに熟成すべされた純白クリームが、ジュワツ！と心地よく登り詰めてしまう。

「つつつね、姉ちゃんたち、僕、もう……！」

腰が跳ね、最初の波が訪れる。いつもとは違う、つき抜けるようなものではない、根本からトロトロにされてしまうような脱力にも近い絶頂感。

つつびゆぶう!! どびゆつ! どびゆつどびゆつびしゅううううつつつ!!!

「「「つあああああんつつつ!! はあああああああんつつつ!!!」」」

ダブルパイズリとフェラによる、愛弟勃起の快楽射精。まさに噴水を思わせる飛沫が、ついに乙女たちの眼前に放たれる。悩ましい悲鳴をあげる美人姉妹。

「あ、ああああ……! ごめん、姉ちゃんたち。でも、ううつ……!」

甘すぎる高まりに根負けして、覗きこむ姉の美顔を次々と汚していつてしまう。思わず謝罪するも、正直な分身は、なおも喜び悶えながらヒクン、ヒクン、ピュツ、と一発目の残りを打ち上げている。そして愛すべき姉たちに、ねっとり雄の——自分の匂いを滲み



こませていくのだ。

まさに、雄の匂い付け。マーキング。背徳感に揉まれながらも、これは自分の女だ、と証明するような淫らな精液顔射。

液体なのにこつてりとした粘性を持った、粘り気の強い雄の一番搾り。それらが一時のシヤワーとなつて、美女たちの頬に、鼻に、額に、髪に、べつたりと張り付いては濃厚な香りで満たしていく。

「つつ……つはああああ……つ。ご、ご主人様のお精子、素敵ですわああ……」

「す、凄い、量……濃くつて、匂いきつくつて、でも……いい、いい……」

「んっ、ちゆるっ。つはああ、ご主人さまの、味いい……おいしいよお……」

しかしマーキングされた美女たちは、白く汚れた美顔を恍惚に蕩けさせて熱いため息を漏らした。そこには嫌悪など微塵もなく、むしろ独占されることを望む女の喜びしか浮かばない。

「はあ、はあ。姉ちゃんたち、凄く、いやらしいよ」

（姉ちゃんたちの顔、僕の精子でベタベタなのに……何か、綺麗だ）

決していい臭いはずはないのに、小鼻をクンクンさせてまで雄の樹液を堪能する姉の姿は、淫靡であると同時に、どこか本能的な魅力に溢れているように見えてならない。

そして、そんな艶かしさを見せられては、若い情熱など一度で治まるはずもなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)



全国書店で
好評
発売中

【小説】高井村正 / 挿絵：或十せねが

「セクシー退魔師が神様をご奉仕で鎮める伝奇アクション!



全国書店で
好評
発売中

【小説】狩野景 / 挿絵：ぼち

「不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る! ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!



【小説】羽沢向 / 挿絵：ピエール☆おじお

「魔法の天使ルルイエ・ルル! 地球の未来はルルにおまかせよっ☆」

全国書店で
好評
発売中

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 山梨学園戦姫ノブナガ! ①〜③
- 思春期のなアダム ①〜②
- 純情! 帝少女探偵団、赤い探路を撃て!

- 借金お嬢クリス ①〜②
- プリンセスリバー!! 交響する美神と魔境
- BLANGEL 絶になつて踊る患者の夜

- 無敵の姫騎士が外・Mに目覚めたようです
- ピルグリムメイデン 深紅の巡礼聖女

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!